

書評

書評 八鍬友広著『読み書きの日本史』

和田 充 弘
(びわこ学院大学)

Book Review, Tomohiro Yakuwa, Japanese History of Reading and Writing (Yomikaki no Nihon Shi)

Mitsuhiro Wada

In the author's opinion, (1) Literacy in traditional Japanese society adopted variant Chinese as a written language, which created the need for training and mastery in education, but there are differences in the level of attainment in early modern terakoya. (2) Regarding the structure of literacy in early modern Japan, the world of typical written culture was at the top, and the world of practical document manipulation was at the bottom, and terakoya could be positioned in the preparation process for the latter. (3) The ability of most people to read and write is a result of modern school education, but the quality of this was different from early modern literacy. In response to this, commentators point out that although there are clear disparities in educational standards among individual terakoya schools, the tendency to standardize terakoya education reflects an early modern orientation towards general education.

Keywords: education, literacy, Terakoya

本書の特徴は、識字の問題を根底に据えた日本教育史の通史として、著者八鍬友広氏のこれまでの業績、教育史および関連諸分野の先行研究をもとに、わかりやすくまとめたところにある。説明の順序は識字からテキスト、教育施設へと進み、寺子屋と往来物に代表される近世教育と近代学校教育とは、対照的なものとして描かれている。

以下、本書の内容を紹介していくと(八鍬 2023)、まず漢字・漢文を日本語に採り入れるにあたり、漢字・漢文の表意性と正統性を生かした変体漢文が、その中でも最終的に候文が選り取られ、御家流という江戸幕府文書の公式書体が民間に普及したこともあり、近世初期にはこうした書き言葉の形式と書式の標準化・斉一化が達成されたという。つまり話し言葉に近づける形で書き言葉が形作られたのではなく、話し言葉と分離した書き言葉を識字の対象とす

るようになったことから、一定期間にわたる訓練と習熟が不可欠になり、そこであらためて識字と教育・学習の必要性とが接点を有することになったと捉えられている。

つぎにこうした識字のテキストとして普及したのが往来物であった。往来物は当初、手紙や公私文書の文例集であったが、語彙、地理などを含み、近世には初学者用の書籍、あるいは習字手本の総称として扱われるようになる。「直江状」「大坂状」のように徳川幕藩体制に相反する内容を含むもの、「目安往来物」のように一揆訴状がテキスト化されたものなど、近世の往来物は多種多様さを極めることになる。手紙文が識字のテキストになること自体は、中国の「書儀」をはじめ世界に諸例を確かめることができる。それでも日本社会において往来物が長きにわたり隆盛を保った理由として、著者は、候文とい

う独特の書き言葉の学習に適していたことに加え、強力な権力者によるテキストの指定が無かったことを挙げている。近世の往来物は民衆の日常生活に即し、その自発性に支えられた書物であった。そして明治に入っても往来物は書式文例集として命脈を維持し、一般の実用書・専門書へと転化することでその終焉を迎えるという。

さらに往来物を使用する寺子屋について、著者は17世紀から各地で登場しており、幕末になってから激増するという立場は取らない。しかしこうした教育施設としての普及の反面、教育成果の実態について、そこには限界があったとみる。寺子のそれぞれによって往来物の学習量には差があり、候文で手紙が書けるようなレベルに達する人は、1割前後に過ぎなかったという。そこで著者は「正統的周辺参加」という概念を用いることにより、こうした寺子屋の実情についての理解を試みる。つまり近世の人々は家と地域社会（支配と自治の単位としての町・村）に属し、さまざまな職分における一人前の人間となるために、初心者から熟達者へと成長を遂げなければならない。その要件のひとつである識字に関しては、寺子屋だけでは完結せず、それ以降の実生活における読み書きの実践を通じて熟達が求められ、あるいは差異化が生じてゆくのであった。識字とそこから展開する文化の社会的な実態については、「在村文化」「分限教育論」「文化的中間層」に関する研究も紹介し、著者の説明は丁寧である。

以上の考察を踏まえて、著者は近世日本におけるリテラシーの構造について、それは上部に代表的な文字文化の世界、すなわち「文化界」を置き、下位に実務的な文書操作の世界、すなわち「文書界」を置きながら、多様性を含む全体として機能していたと総括する。そしてこうした図式の中に寺子屋を位置づけ、それは基礎的な読み書きの過程を、基本的な「文書界」への参画の準備過程を担う場であり、学問塾や漢籍、文芸など、より上位へのアクセスを射程に収めた場でもあったとする。識字をテーマとすることにより、子どもの手習い塾にとどまらない、より広範かつ焦点をあてた寺子屋への評価がなされている。

そして近代の識字については、明治期の統計調査を踏まえ、近世のような格差もその解消に向かい、ほとんどの人が読み書きのできる社会に到達したとみる。それをもたらした近代学校に関しては、教育目標（国民教育）、教育内容（各教科）、労働・生活との分離、就学強制、言文一致の教科書、手習いが

さまざまな知識を含むような総合性の喪失といった諸点をもとに、近世との相違を強調している。ただし従来の読み書きの重視が形を変えながら（「読み書き教材の中に知識を埋め込む」内容主義の国語教育）「書字随伴型学習・授業」へと展開していることにも触れている。

以上の諸点から、本書において、日本の伝統教育では、書き言葉の識字が規定する形で、テキストと教育施設とに密接な関係を有し、寺子屋に始まる識字の熟達度に差異が生じていることを知ることができる。

以下、近年の研究を踏まえながら、評者の見解を述べておくと、第1に、筆者が指摘する識字の熟達度に対応し、実際の寺子屋における格差の所在は明白である。近江五個荘の時習齋はレベルの高い寺子屋の代表的な事例だが、その一方で、幕末・維新期に零細規模の多数の寺子屋が、ほぼ一代限りで経営を終えたのも事実である。ただし近世中・後期以降の寺子屋では、自然発生的な形での教育内容の共通化傾向が生じていることも知られている。

そこで第2に、識字レベルの差異化とは別に、こうした共通化傾向の中には、近世的な普通教育と呼ぶいう一定水準以上の基礎的な教育への志向が具わっていたのではないか。それは画一的なものではなく、版本往来物の流通に加え、複数の寺子屋間の影響関係や個々の師匠の創意工夫をもとに、個性や多様性を併せ持つ共通化だったのではないか。近世的な普通教育の内実と可能性を問うことが、今後の寺子屋研究の課題であることを指摘しておく。

第3に、往来物の主要な記載内容である文書については、支配、役所、契約に関する公的なものと、近世庶民の場合私的なものが占めるようになる消息（手紙文）とは、一括せずに区別して取り扱うべきであろう。明治以降も命脈を保ったのは主に前者であり、往来物の主流は後者であった。その点から寺子屋で使われる往来物の終焉については、幕末で一区切りできると考えておく。

伝統社会が作り上げた識字の複雑な構造は、教育の本質を見極めるための手がかりとなりうる。近代学校がもたらした、ほとんどの人が読み書きのできる状況において、それまでの識字が要した負担を軽減していく際に、教育上価値を有する負担を切り捨てたり、教育のためとはいえ負担をあらたに課したりすることは無かったか。人工知能の行き過ぎた台頭が懸念される昨今、学習者のために真に必要な負担についての吟味が求められよう。

参考文献

八鍬 友広 (2023). *読み書きの日本史* 岩波書店

要約

著者の見解では、①日本の伝統社会における識字が書き言葉としての変体漢文を採用するところから、教育における訓練と習熟の必要を生じたが、近世の寺子屋において、その到達度には差異がみられた。②近世日本におけるリテラシーの構造について、代表的な文字文化の世界が上位に、実務的な文書操作の世界が下位にあり、寺子屋は後者の準備過程に位置づけることができる。③ほとんどの人が読み書きできるようになるのは、近代学校教育の成果だが、それは近世の識字とは質を異にするものであった。これをうけて評者は、個別の寺子屋では教育水準の格差が明らかだが、寺子屋教育の共通化傾向の中には、近世的な普通教育への志向がみられたことを指摘する。

キーワード：日本教育史，識字，寺子屋，往来物